

登録有形文化財（建造物）

松ヶ崎八幡神社本殿
松ヶ崎八幡神社拝殿・幣殿及び本殿覆屋

- 1 対 象 松ヶ崎八幡神社本殿
松ヶ崎八幡神社拝殿・幣殿及び本殿覆屋
- 2 所 在 地 秋田県由利本荘市松ヶ崎字宮ノ腰102番地
- 3 構造、形式 本 殿：木造平屋建、板葺、建築面積11㎡
及び大きさ 拝殿・幣殿及び本殿覆屋：木造平屋建、瓦葺、建築面積71㎡
- 4 所 有 者 宗教法人八幡神社
- 5 登 録 基 準 本 殿：二造形の規範となっているもの
拝殿・幣殿及び本殿覆屋：一国土の歴史的景観に寄与しているもの
- 6 説 明

松ヶ崎八幡神社は、日本海に流れる衣川の下流右岸にある亀井山に位置している。現在の石清水八幡宮の末流にあたり、元和9年（1623）に岩城氏が御神体を保護して岩城亀田に入部し、寛永元年（1624）松ヶ崎亀井山に勧請して岩城家の崇敬社とし、寛永13年に社殿を建立したと記録にある。藩政期には亀田藩の総社として、八幡宮・天満宮のほか総社宮に領内75社の分霊を祀った。

【本殿】桁行3間、梁間2間、三間社流造、木羽葺

正面に三間の向拝が付く。本殿全体が木造、棧瓦葺の覆屋で覆われ、幣殿及び拝殿と結ばれている。前方部一間を外陣、後方一間を内陣とし、中央に八幡宮、向かって右脇間に天満宮、左脇間に惣社宮を祀る。総檜造、総漆塗で、装飾が多く施されているが全体的に均整のとれた建築である。建築年代は、棟札はないが、意匠等の技法から江戸時代後期と考えられている。建立後の修理痕も全く無く、建立当時の状態が保存されている。

【拝殿】桁行3間、梁間3間、切妻造、棧瓦葺

正面に一間の向拝が付き、拝殿側廻り3面は切目縁で組高欄が付いている。拝殿前面は拭板張で、拝殿内は広い畳敷きである。向拝は方柱で、水引虹梁の端部に木鼻が付く。斗拱は、中央部は三ツ斗、向拝柱上部は和様三斗組で背面に手挟みが付く。天井は格天井で、鏡板165枚全てが色彩画となっている。建立年代は、棟札から明治31年と考えられる。同時代の拝殿として典型的な形式で、地域においては大型の拝殿に分類される。

【幣殿】桁行2間、梁間3間、両下造、棧瓦葺

両脇間は拭板張で、中央にやや高い舞台状で正方形の畳敷きの間を配している。他の柱は方柱だが、中央間四隅の柱は黒漆塗の円柱で、舞殿の様相を呈している。天井は格天井が基本で鏡板に絵が描かれ、中央部の鏡天井には龍が描かれている。建立年代は、棟札から明治31年と考えられる。現在でも例大祭では、中央間で神楽等が演じられている。



本殿正面



拝殿正面

用語説明

岩城氏 岩城吉隆が信濃国高井郡川中島から国替えを命じられ入部し、亀田藩2万石を領した。

桁行・梁間 ^{けたゆき} 桁行は、桁がかかる方向、または桁を支える両端の柱の中心から中心までの距離を意味し、一般的には棟と平行する建物の長手方向のこと。^{はりま} 梁間は、桁行と直交する梁の通る方向のことで、一般的には建物の短手方向のこと。

三間社流造 ^{さんげんしやながれづくり} 神社建築様式の1つで、神明造から発展し、屋根が反り、屋根が前に曲線形に長く伸びて向拝（庇）となったもの。正面の柱間が1間（柱が2本）であれば一間社流造、3間（柱が4本）であれば三間社流造という。

木羽葺 ^{こばぶき} ^{こつば} 木端で葺いた屋根のこと。木端は25cm×15cm×0.5cmぐらいのスギなどの薄い板のこと。

向拝 ^{こうはい} 本殿や拝殿で屋根の一部が前方に突き出し、拝礼の場所となっているところを指す。

棧瓦葺 ^{さんがわらぶき} 棧瓦は断面が波形で、一隅または二隅に切り込みのある瓦。本瓦葺きの^{おがわら}牡瓦と^{めがわら}牝瓦を一枚に簡略化したもので、江戸時代に考案された。

覆屋 貴重な建物を風雨から保護するために、それを覆うように建設された建築物で、鞘堂ともいう。

両下造 ^{りようさげづくり} 切妻造の妻がないような屋根形式のこと。

拭板 ^{ぬぐいいた} 表面を平滑に削り上げた床板のこと。

鏡板 ^{かまち} ^{こうぶち} 框や格縁などの間にはめ込んだ平滑な板。建具・天井・壁などに用いる。

鏡天井 ^{さおぶち} 棹縁や格縁などを用いず、板を鏡のように平滑に張って仕上げた天井のこと。

切妻造 切妻屋根をもつ形式のこと。切妻は日本建築古来の最も一般的な屋根の形式で、妻（屋根の端）を切った形の形式のこと。二つ折りの四角い紙を山形に伏せたような形を指す。

切目縁 ^{きりめえん} ^{えんいた} 縁板を敷居と直角方向に張った縁。濡れ縁に用いる。^{こぐちえん} 木口縁、^{くれえん} 樽縁ともいう。

組高欄 ^{くみこうらん} 高欄は、縁や階段などの端に設ける装飾と安全を兼ねた手すりのこと。

水引虹梁 ^{みずひきこうりょう} 社寺建築の向拝正面の虹梁のこと。虹梁は弓なりに曲がっている梁のこと。

木鼻 ^{きばな} 木の端のこと。複数の縦柱を横に貫ら抜く柱（^{かしらめき}頭貫や虹梁）等の端に付けられた彫刻のこと。

斗栱 ^{ときょう} 柱または台輪^{だいわ}の上であって、軒や天井などを支える木組の部分のこと。^{ます} 斗や^{ひじき}肘木で構成し、^{くみもの}組物ともいう。

三ツ斗 ^{みと} 組物形式の一つで、^{ほうと}方斗およびその左右の^ま巻き斗からなる^{とぐ}斗組みのこと。

和様 社寺建築の様式名。社寺建築は飛鳥・奈良時代に中国や朝鮮半島から伝わって以来日本化が進み、平安時代後期頃に完成した日本的様式のこと。このほか、鎌倉時代初期に中国から伝わった大仏様と禅宗様、それらの様式が混合した折衷様があり、斗栱の形や構成それぞれ異なる。

手挟み ^{たばさ} 手挟みは、向拝柱の斗栱と垂木^{たるき}との間に取り付けられた板のこと。^く 割り^{がた}形などの装飾が施される。

格天井 ^{ごうてんじょう} ^{ごうま} 格天井は格間によって形成された天井。正方形、もしくは八角形の区画を、漆喰や木材によって分割する。各区分を格間、その縁を格縁^{こうふち}という。格間は無飾の場合もあるが、多くは絵画や装飾文様で飾られる。